

このように「メタ概念図式」すら相対的にしか定まらないのであれば、我々のすべての認識は無根拠である。そのような無根拠性は、「信」によって覆い隠されていると発表者は考える。我々は同じ「現実(かのようなもの)」を同じように見ていると「信」じることによってしか、無根拠に脅かされることなく生きることができない。

そして、無根拠の上に所在なく佇んでいる「現実かのようなもの」は、広義の〈虚構〉概念に含めることができるだろう。改めて「現実／虚構」の区別は崩壊し、〈虚構〉は豊かな力をもつものとなる。この〈虚構〉こそが、「信」と並ぶ発表者の研究対象である。

最後に、科学もまた「信」じられているものに過ぎないことを述べた上で、宗教学において科学がいかに扱われるべきかという問題にも多少触れた。現代において、科学を忌避することはできないが、過大な期待をすることは危険である。自然科学の「概念図式」が捉えきれないものを、人文科学の「概念図式」は扱い得るだろう。本発表は、それを示す試みでもあった。

### 近年の宗教心理学における死と宗教

—— 比較的考察 ——

イーリヤ・ムスリン

本発表では、全般的な宗教の説明を目指して、ここ二十年以上宗教学研究に多大な影響を与えている三つの大理論(恐怖管理理論、宗教の合理的選択理論、進化心理学)を取り上げてい

る。発表の主な目的は、それぞれの理論における宗教概念や死の捉え方を簡潔に分析した上で、これらの理論における宗教と死の関係に対する考え方を比較し、問題点や課題を指摘することである。その際、宗教の多様性を重視し、研究者の宗教概念を問いながら自文化中心の態度を批判する宗教学的なアプローチ、また死の不安の多面性や複雑性を意識する死生学的な立場を念頭に置いている。

三つの理論における死の位置付けを考察すると、次のようにまとめることができる。恐怖管理理論(TMT)は、死の不可避性や自己の有限性に対する意識と死への不安・恐怖の普遍性を想定し、それに基づいて宗教を説明しながら、死の不安の緩和を宗教の最大の機能ないし魅力としている。研究の主な対象は、死に対する無意識な不安とその行動への影響であり、これらが宗教の発生や維持を説明する上で不可欠な観点である。これに対し、宗教の合理的選択理論(RCT)は、宗教を説明するための複数の理論的な前提の中に人間の普遍的な心理として不死への欲求を盛り込む。そして宗教全般を、その欲求を満たすような約束を提供するものとして捉えながら、経済学的な概念を用いて、宗教市場の動向や教団の形成・特徴・ライフサイクルなど、主に社会レベルの宗教現象に注目する。つまり、死に対する意識は中心的な研究対象というより、理論の重要な出发点であると言える。これとは異なつて、進化心理学(EP)は、全体としてみれば、宗教における死という問題をそれ程大きく取り上げない傾向がある。EPでは、宗教概念の形成や特徴、その伝達、または道徳的な規範、儀礼、聖職者階級の形成

や役割など、様々な宗教の要素を、人類が直面した環境問題に即して自然淘汰の過程の中で進化してきた心理的メカニズムによって説明する。死に対する認知的反応や認識を考慮に入れているとはいえ、主として関心はそうした具体的な環境適応問題や心理的なメカニズムの働きが宗教に与えた影響に向けられている。特筆すべきは、この学派では、死を人間が直面する実在的な問題として扱い、死関連の情緒的な次元も視野に入れていく学者がいることである。

TMTとRCTに関しては、来世を快適な場所、死者を再会の望ましい身近な存在と捉えるような有神論に偏った宗教概念が研究の背景に見られ、そうでない信仰には関心が及ばない問題がある。加えて、宗教において死への不安を煽る効果を認めたり、あるいは死に対する態度と宗教信仰の間に明確な相関関係が確認されないような実証研究を十分に参照あるいはそれに反論しないまま、宗教と死の関係に関する一般論に陥る傾向も見られる。また、EPのアプローチが、悲嘆及び死に関する宗教儀礼を説明しうるとはいえ、死の不安の多面性や具体的な人間の生き方への影響、死についての宗教思想などを考慮していないため、宗教における死の位置や機能についての説明としては、全体的に、不十分であると言えよう。したがって、宗教と死の問題に関するこうした研究には以下の諸点が求められるだろう。宗教信仰や実践の多様性をより強く意識し、自文化中心的な宗教概念を避けること。信者の死に対する態度について論じる際、必ず心理学的な実証研究を参考にすること。死体や死者に対する認知的反応、あるいは死への不安・恐怖といった、

ひとつの死の次元に議論を限定することなく、死の問題の多面性を認識し、また常に意識するアプローチを採用すること。そして最後に、一般的な宗教の説明を目指す上で、単独の理論のみを用いるのは難しいため、他理論とのさらなる融合を進める必要があると思われる。

### 心と脳概念性と実在

沖 永 宜 司

脳作用を統御する、脳を超えた意識を設定すると、この意識は物質ならざる何かとして謎になってしまう。合理的判断では脳作用を統御する自由意志が必要であり、脳と意識とは互いに協力関係になくはならない、という見解の問題点はここにある。反対に脳科学は、脳作用全体を統御する意識や、「私」という判断主体までを、全体が統一しながら部分がダイナミックに変動する、視床―皮質系内部の機能クラスターとして理解する。ここで脳以外の統御的な意識は必要なく、様々な脳作用の統御や判断、対象への価値付与までも脳自身によるものとされる。そこで意識は物理主義に完全に則り、原理的に決定論に従う。しかしクオリアや「私」までもが、あくまで物理主義的に理解される場合、一人称的な感じや意識の自発性は、説明不能な何か、非存在になるしかない。

そこで、物質ではない「もの」を設定せず、しかも主観性や自由意志をそのまま承認する方法が求められる。そのために、